

ある『本草集方』だろう。この書も『証類』に基づき、やはり天下無二の孤本。かつ序跋も刊記も識語もないため従来、宋版とも金版ともされてきた。しかし近年、台北・故宮の呉璧雍氏が蒙古・元間の蜀版と推定している。そこで『備急総効方』と簡単に比較してみたところ、両書は同工異曲であり、内容・版式ともに直接の関連は認められなかった。また『本草集方』は引用出典を記さず、存八巻の残欠本である点からも『備急総効方』には及ばない。

第三は本書の摩訶不思議さで、小曾戸氏が縷々解説されている。すなわち本書の書名部分が八一箇所にわたり、極めて巧妙に「備急総効方」から「備全総効方」に改変されていた点。しかも巻一の第一〜一四葉だけは近代の精緻な補刻で、その巻頭でも「備全総効方」の書名で彫られている点である。

仿宋版を本物の宋版に偽る各種捏造はすでに明代から横行しており、それら痕跡が遺る書は北京・故宮の旧蔵本中にすら少なくない。しかし本物の宋版医書に近代さらに改竄を加えた例は、管見の範囲で本書が最初だった。台湾国家図書館所蔵の宋版『新大成医方』は、『嚴氏濟生方』本文の宋刻版本と『嚴氏濟生統方』序文の宋刻版本を用い、書名・著者名のみ埋め木で捏造した元代の印本という例もあるにはあるが。なお『備全総効方』に捺された蔵書印記の一部も丹念に削り取られており、同類の作爲は各地の蔵書でしばしば見かける。いずれにせよ伝承経緯の一部を隠蔽

し、また高価に売却するため要因とも思われ、想像力をかき立てられてしまふ。

ともあれ貴重な宋版の『備急総効方』全巻が美しく影印され、一冊の縮刷本として出版されたことにより、今後は容易に研究利用できるようになった。本日届いた『中華医史雑誌』最新号の巻頭論文には、小曾戸氏による本書の研究が掲載されていた。その価値が故国でも認知された慶事といえよう。斯界の一学徒として、当書の出版を英断された武田科学振興財団にも感謝申し上げたい。

(真柳 誠)

〔武田科学振興財団 大阪市淀川区十三本町二一七一―八五  
A四判 総五七四頁 二〇〇五年三月九日発行〕

W・J・ピショップ著、川満 富裕 訳

### 『外科の歴史』

本書は『The Early History of Surgery (一九六一)』の翻訳書である。訳者のあとがきによれば、「表題を初期史としなかったのは」Surgeryという英語の原義は手術ということであり、本書で著者がいわんとしていることは外科学という学問の歴史ではないと思われるからである」とある。

しかし、丹念に読んでみての感想は、やはり副題にでも「近代以前の」という注釈があった方が、読者あるいは店頭

に並べられる場合、選択のためには注目を引いて親切な気がする。

反面、全文一〇章のうち八章を占める一九世紀までの記述は、きわめて興味深く詳細である。

先史時代で創傷被覆、すなわち外部からの創傷保護の概念が現代と変わらないことは、今の創傷処置の源流を見る思いがする。感染、乾燥防止にはデブリードマンとともにきわめて重要で、外科医としての第一歩の教育である。

古代の創縫合についても、これまでの医学史では歴史的事実はほとんど無かったが、ここでは有孔の骨針の使用、腹部の創閉鎖にクリップ作用をさせるため、白蟻や黒蟻に創縁を噛み合わせさせて、その後この昆虫の胴体を切り落としておく方法があつて、ユーモラスでさえある。縫合材料は古代インドでは麻糸、亜麻糸、樹皮繊維、毛髪など、また針も丸針、角針、曲針がすでに使用されている。

アフリカでは腸が飛び出した創には、還納後小さな瓢箪を入れて創を閉鎖する、いふなれば現在の死腔を作らない考え、など人類の知恵に驚かされる。

蛭が瀉血に用いられたのも先史時代から行われたらしいが、これは現代でも浮腫、血腫の吸収のため使用されているもの興味深い。

穿頭術、切断術の詳細も述べられていて、その生存率の高さは見事である。穿頭術ではメラネシアの未開な先住民外科医は、七〇%以上の生存率をえているという。

エジプト古代の医療者は保身的で、絶望的な患者には関わるべきではない、という考え方であった。治療して患者が死ねば、不運な医師は串刺しの刑に処せられたからである。現在の最後まで症状緩和を計る医療との差がある。

わが国の古代の記述では、丹波康頼の「医心方」が紹介されている。華岡青洲のことも触れているが、日本で初めて四肢切断術を行い、腫瘍を摘出し、舌癌、痔瘻を手術したこと、トリカブト、チョウセンアサガオの煎じ薬を手術前に投与した、と簡単な記述がある。

第二章までが古代に費やされ、このあとは第六章までギリシャ、ローマ時代、中世ヨーロッパ、ルネサンスが続く。この辺りの記述は、これまで汗牛充棟の出版物があり、多くの人達に知られている事実が述べられている。

私にとつて興味を引いたのは、日記作家サミュエル・ピープスの日記である。日記そのものはすでに出版されているが、死体の解剖講義に立ち合った経験が記述されている。当時（十七世紀）、理髪外科医組合では年四体の罪人の遺体を解剖する権利があり、公務員や知名士は解剖に参加を許されていた。ピープスもこれに参加して、解剖の実際を見学し、講義も聴いて「非常に満足した」と語っている。

以後十九世紀前半まで、重点的に略史が述べられている。それは当然、制腐法、麻酔法の歴史である。

私が医学生時代の頃（一九五〇年代）は、外科総論の試験のやまは、外科手術の進歩に寄与した因子を三つ挙げよ、で

あった。すなわち、輸血、麻酔、抗生物質と書けば満点であった。当時を思えば、現在のロボット手術、内視鏡手術、分子レベルの知見の進歩は目をみはるものがある。これは別の専門の図書をたずねなければならぬ。

しかし、これまでの歴史を顧みて、先人の知恵、経験を生かすことはきわめて重要である。この意味で本書が、外科学の古代から近世までの指針としては、大きな役目を果たすに違いないと思う。外科系以外の人々にも推奨できる。

最後にもう一つ優れているのは、固有名詞の記載が原音に近く、綿密に調査されている点である。ともすれば、特に英語以外はいい加減な記載が多いなかで、正確さに感銘を深くした。

ただ、ピエール・テソーは綴りを見ると、このように発音したくなるが、フランス人医師は「ドウソー」と発音する（p.二二九以下数箇所）。これは私がフランス留学中、実際に確認している。「パイロニー」（p.二四〇）は、「ペロニー」であり、「バジエット」（p.二〇六）は「バジエツト」である。私は整形外科医なので、専門用語の誤りも気になる。例えば、「骨のご指定」（p.三三）の意味は解説が欲しいし、「橈骨下端」（p.一七三）は整形外科学会、解剖学会の用語は「・遠位端」と定められている。（ミスプリントと思われるが、p.二九六では「橈骨」が「撓骨」になっている）是非、改訂の機会に訂正を希望したい。

色々、失礼な言葉が重なったが、これは本書の価値をい

ささかでも失わせるものではない。

（小林 晶）

〔時空出版、東京都文京区小石川四一八一三、電話〇三一三八二一五三三三、二〇〇五年八月一日、B五判、二四八頁、本体価格三〇〇〇円〕

酒井 シヅ 編

#### 女医吉岡弥生の手紙「愛と至誠に生きる」

本書は、明治二六年に医師となり、のち現在の東京女子医科大学の前身である東京女医学校を創設した吉岡弥生の書簡集である。書簡は東京女子医科大学史料室に保管されているものに今回の企画のために新たに収集されたものが加えられ、それぞれ同史料室の調査に基づいた詳細な注が付されている。

構成は巻頭の「グラフィティー吉岡弥生」で、その生涯を写真で辿り、さらに「吉岡弥生と女子医学教育」で吉岡弥生の前半生を中心に解説し書簡集へと導く。書簡は、第一部「女医を育てて」、第二部「試練に耐えて」、第三部「幸せな晩年」と分類され、年代別に紹介される。個々の書簡には注の他に適宜解説もつけられている。さらに東京女子医学専門学校・女子医科大学の卒業生による「私の吉岡弥生」、略年譜、最後に書簡の内容に呼応するきめ細かい解